

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 8 月 28 日（第 32 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

子どもたちを支えている大切なものの一つに「教育」があります。私たちは、学校の先生から、本当に色々なことを教えてもらっています。私が教えてもらった中で忘れられない出来事を紹介します。

所長 小沢 浩

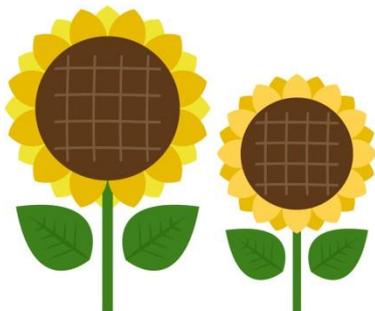
～バトン～

若葉萌えはじめた6月、O君が外来にやってきた。O君は高校2年生で養護学校（現在は特別支援学校）の先生と一緒に来た。O君は、体重が5キロほど減ってしまい、皮膚にはりがなく、栄養に問題があるのは明らかであった。私が「どうしましたか」と聞くと、お母さんが「……体重が減ってしまったんです……」と一言。その後、同行したP先生が今の状態を説明してくれた。食事は1時間以上かけてむせながらやっと食べるという状態であること、食事の形態や姿勢を色々工夫したけれどどうまじかないこと、などを。私は、お母さんが医療に我が子を任せられない、だから私が守らなければいけないと思っている、そんな決意のようなものを感じた。注入に変更したら

いいのは誰の眼にも明らかであった。しかし「注入という方法もありますよ。」と説明するにとどめた。O君はその後も外来にやってきた。P先生も必ず一緒に来た。摂食外来を受けてもらったり、色々工夫を凝らしたが、注入には納得してくれない。そこで私はお母さんにある提案をした。「朝の忙しいときだけ、注入にしてみたらどうでしょう。そのほうがお互いにとって楽ですよ。忙しくて時間に追われているときには誤嚥の可能性が高くなりますから。朝以外の時間が十分とれるときにゆっくり食べて食事を楽しみましょう。」お母さんはそれから朝の注入を始めてくれた。

O君の外来はいつしかQ先生とR先生に代わった。私は、そのことを特に気にもとめなかった。O君の体重は徐々に増え、顔色もよくなり、表情も豊かになっていった。笑顔が増えた。それとともにお母さんの笑顔も増えてきた。

「お母さん、食べることで我々にとっては楽しみかもしれないけれど、誤



嚙しながら食べるって辛いんだと思います。我々がむせたときは、気管に入っていることが多いんです。そのときはすごく苦しいですよ。それがいつものことであれば、とても辛いと思うんです。そういうときは、食事中あまり笑わない、気が散って周りばかり気にする、口の動きが悪くなり食べようとしない、などのサインで伝えてくれるんです。O君は最近表情が豊かになってきています。誤嚥が減ってきていることがいい影響を及ぼしているんだと思います。食べる以外の楽しみもいっぱいあるので、食べること以外で楽しみを増やしていきましょう。」お母さんは、納得してくれて注入だけにしてくれた。外来に来てから1年の月日がたった。

ある日のこと、私に知らせが届いた。それはあまりにも突然だった。

「P先生が亡くなった。」私はあわててお通夜に駆けつけた。そのときに初めて知った。P先生が進行性のスキルス胃がんだったことを。お腹に何かあると春にわかったけれど仕事を優先して夏休みまで検査を先送りしたことを。どんな体調の悪いときでも弱音一つはかずに治療を続けながら笑顔で仕事をしていたことを。かつらをつけて仕事していたことを。皮膚が黒ず

んできたときに生徒から「先生、陽に焼けたの？」と聞かれると「そうよ、焼けちゃった。」と明るく答えていたことを。卒業式のときにO君を抱っこしていたら下肢が麻痺して動けなくなってしまったことを。腰痛で動けなくなり救急車で病院に行ったら転移だとわかったことを。残りの人生をすべて子どもたちのために捧げていたことを。

P先生が私のところにやってきたのは、病と必死に戦っているそんな最中のことだったのである。P先生は、命をかけて私にバトンを渡してくれた。

「毎回、O君に付き添ってくれて、私の外来を何時間も待っていてくれたP先生。長いときには2~3時間も待たせてしまいました。辛かったですよね。ごめんなさい。バトンはしっかり受け取りました。これからしっかり持って走っていきます。どうかご安心ください。先生はご存知のことと思いますが、O君は、喉頭気管分離術をして口と胃瘻から毎日食べています。そして笑顔いっぱいでも過ごしています。でも私の外来のときには笑ってくれないんですけど。これからも天国からあの明るい笑顔でいつも私たちを見守っていてください。」

（奇跡がくれた宝物 小沢浩著
クリエイツかもがわ より）

